

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成23年10月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 防災研究所

職 名 教授

氏 名 石川 裕彦

助成の種類	平成23年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成		
事業内容	国際シンポジウム「地球科学の挑戦」－第2回オクラホマ大学－京都大学サミット		
開催期間	平成23年9月14日 ～ 平成23年9月16日		
開催場所	オクラホマ大学(アメリカ合衆国オクラホマ州ノーマン市)		
参加者	123名 + α	内 訳: 日本人参加者25名、他(オクラホマ大学、米国海洋気象庁、フランスグルノーブル大学等)	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(Flyer, Program, Proc.)		
会計報告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	5,255,805 円
	うち当財団からの助成額		1,240,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	Global COE経費、生存圏研究所共同利用研究経費、他
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	外国旅費	5,114,314	1,216,526
	国際シンポジウム参加登録料	75,086	23,474
	その他	66,405	0
	合 計	5,255,805	1,240,000

成果の概要／石川裕彦

2008年3月に、オクラホマ大学大気地理学部と京都大学防災研究所、京都大学生存圏研究所との3者間で、大気科学の研究教育推進に関する協定が締結された。この協定に基づき、第1回の国際シンポジウム「International Symposium on Observation and Modeling Studies of the Atmosphere」を2009年11月に宇治キャンパスおおぼくプラザで開催した。本シンポジウムは、これに引き続き第2回目の国際シンポジウムとして、2011年9月14日から16日までの3日間、米国オクラホマ州ノーマン市にあるオクラホマ大学 National Weather Center で開催した。第2回の今回は、新たにオクラホマ大副学長（兼大気地理学部の Dean）に就任された著名な気候学研究者である Prof. Moore と、日本を代表する海洋学研究者である本学の淡路敏之副学長を Bi-chairman とし、シンポジウムのテーマも最近2年間の両大学での研究領域の拡大を包含するため、'Earth-science Challenge'と少し大上段に構えたテーマを据えた。

シンポジウムの Bi-chairman である Moore オクラホマ大副学長から、'Earth Observations: What is needed and why?', 淡路京都大学副学長からは、'Ocean Reanalysis and coupled Data Assimilation'と題する基調講演があり、多くの聴衆を集めた。

3日間にわたる研究発表では、オクラホマ大学、京都大学各々の Showcase Session, レーダー技術、データ同化、モデリングなど5つの領域をカバーする8つの Oral Session と Poster Session が繰り広げられ、全部で113件の研究成果が発表された。参加者総数は、事前登録者だけで123名、このうち日本からは生存圏研究所と防災研研究所の教員学生、GCOE-ARS「極端気象と適応社会の生存科学」に関連する理学研究科の教員/研究員/学生、さらに気象庁の連携研究者等を含め24名が参加した。また、深尾昭一郎京都大学名誉教授（生存圏研究所）の参加も得た。

セッションの合間には2回にわたる short tour が行われた。一つは、開催場所である National Weather Center とその付帯施設である。オクラホマ大学では産官学連携研究を進めており、National Weather Center はその核となる。同センターには、米国海洋気象局のストーム予報センターや州の環境関連部門が入居しているのに加え、計測器関連会社や民間の気象サービス会社、プレスなどが同居している。これらの組織は学生のトレーニングの場となり、かれらの就職にも繋がるものである。日本ではなかなか実現が難しそうな羨ましい研究教育体制であった。もう一つのツアーは、キャンパス内に点在する先進レーダー技術の研究施設を廻るツアーで、イージス艦の艦橋をそっくり移したようなフェーズド・アレイ・ドップラーレーダーなど、米国ならではの研究設備が印象的であった。

会議の合間には、京都大学とオクラホマ大学双方の主要メンバーによる Steering Board Meeting が開催され、これまでの研究協力の総括と今後の発展について意見交換をし、第3回のシンポジウムを2年後に京都で開催すべく準備を進めることが合意された。